

伊藤若冲「菊花流水図」の画法について

1. はじめに

私が伊藤若冲(1716-1800)に初めて接したのは1974年以前である。それがどのような絵であったのか、それをどこで見たのか、今思い出すことができない。「群鶏図」だったかもしれない。とにかく非常に強い印象を持ったので忘れられず、「平凡社ギャラリー」のシリーズで『若冲』が発刊されると同時に買い求めたことを覚えている。1974年がその画集の発刊年である。

若冲の日本画とは思えない強い表現はそれ以後、ずっと気になっていた。2, 3年前に金比羅宮の書院が公開されているのをポスターで知ったとき、是非見に行きたかったのだが、時間がなくて香川まで行けなかった。今でも残念である。

私にとって若冲の魅力は各作品ごとに異なっているように思われる。「菊花流水図」の場合には、以下のような点に惹かれる。

- ・菊の花びらの精緻で装飾的な表現
- ・流水のうねりと深さの表現
- ・流水と呼応する枝の流れ
- ・何の物体か不明の緑の塊
- ・その背後の赤い菊の花との色の対比、および白い菊と赤い花びらとの形・線の対比
- ・菊の花だけ見ると上部が近く、下部が遠いという珍しい遠近構成になっているにもかかわらず、流水や枝の遠近

法はその逆になっていること

- ・隠し絵のように配置された鳥や魚

中でも花びらの一枚一枚を見ているとその美しさとリズム感があまりにも幻想的で眩暈を感じるほどである。さすが「柘目描き」を編み出した画家だと、その分析的・構築的姿勢にも感嘆してしまう。このような魅力に富む作品を若冲はどのようにして生み出したのだろうか。

2. 若冲の作品研究

伊藤若冲は後学の画家で、中国絵画の模写を行っていたことは講義の中でも出ており、一般に知られていることである。また琳派からの影響も指摘されている。これまで行われてきた研究によって、日本美術史において特異で独創的に感じられる彼の作品は、彼の恵まれた才能と並んで研究の成果でもあったことが判明している。山下裕二は彼の作品について「社会的なネットワーク、また、様々な先人の造形の学習からの成果である」と述べ、その検証として、『菊花流水図』『雪中鴛鴦図』『秋塘群雀図』『梅花小禽図』を取り上げて、若冲の造形について検証している¹⁾。

この論文に於いて山下は、『菊花流水図』のルーツとして琳派、八種画譜と南蘋派の影響を挙げている。私は八種画譜と南蘋派については全く知識がないので、今後の課題としたい。ここでは若冲の流水を光琳の『紅白梅図屏風』の流水と比較し、その画法について考えたい。

3. 若冲の「菊花流水図」と光琳の『紅白梅図屏風』の流水



図1 若冲の川の輪郭

左に向かって、唯一度右への蛇行が描かれている。



図2 光琳の川の輪郭

図1は若冲の「菊花流水図」、図2は光琳の『紅白梅図屏風』の流水の輪郭線をトレースしたものである。図1で花や鳥で隠されている部分は朱線で補なっている。また、図2の中央の空間は屏風の継ぎ目であり、光琳はこの空間にも水の流れがあることを想定して描いていることが分かる。実際に屏風絵を見るときには、屏風の奥行きがあるので川はもう少し、細く見えるはずである。

若冲の川は左上から流れてくる。蛇行はまず左へ次に右へ、また左へ、そして右に大きく蛇行し、徐々に川幅を増してくる。それに対して光琳では右中央上部から

若冲では蛇行が何度も繰り返されることによってリズム感が生まれている。一方光琳では、蛇行の繰り返しはないものの、流れの右の線と左の線が呼応しリズム感を形成している。

このような相違があるものの、これら2作品の間には曲線の動きの中に共通するものが感じられる。それは、若冲の一番下、右へ蛇行する隠された線の動きと光琳の右の流れの輪郭である。

若冲の作品は縦長、光琳のは横長であり、川の輪郭の比率は異なっている。しかし、光琳の右の線の上下の比率を狭めれば、若冲の線と合致するのではないだろうか。また若冲の同じ蛇行の左側、3本の線で強調された曲りは光琳の左側の誇張された凹みと共通する。それらは相似形と言っても良い。両者の川は左右に大きくくねりながら、極端な遠近感覚で見るものに迫ってくるのである。しかしながら、どちらの川も上下に落ちる流れではない。あくまでもかなり勾配の少ない平地を静かに、しかし豊かに、見るものの方へ向かって流れる来る川である。

流水そのものについて、両者の表現にはかなりの相違がある。図3と図4はそれぞれの流れの表現の部分図である。光琳がさざ波をいくつも繰り返して装飾的なリズム感を感じさせるのに対して、若冲は端的に輪郭線で表している。しかし、濃淡、細太の異なる3本の線を描き、それぞれにグラデーションを加えることによって、水深が感じられる表現となっている。一見概念的に見える表現が実は正鵠な観察によって得られた効果的な表現であることがわかる。

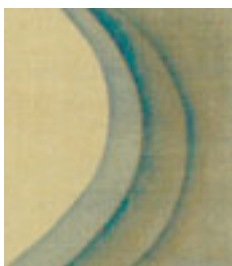


図3 若冲の流水

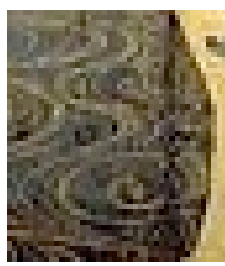


図4 光琳の流水

山下裕二は若冲の流水について琳派からの影響が濃厚であると指摘し、具体的には、尾形光琳の『紅白梅図屏風』の造形を画家が意識していたことは否定できないと述べている²⁾。「両者とも“流水、”というモチーフは意匠化され、画面を蛇行し、二次元の空間に深みをもたらし効果に一役買っている」と述べるのである。

3. おわりに

若冲が光琳の流水に学んでいるとすれば、その後の琳派画家、酒井抱一は若冲のそれに学んだのではないだろうか。図

5は酒井抱一の夏秋草図屏風の部分であるが、この流水では、光琳と若冲の両者が混じり合った上で抱一特有の線と色が流れとなって表現されているように感じられる。



図5 酒井抱一の流水 (部分)

日本画の歴史の中で一見異端のように見える一人の个性的で卓抜した画家もまた、歴史の流れの中にあり、学び学ばれる存在であったことが興味深い。

個人的な趣味として、私は狩野派よりも円山派、琳派などの方に惹かれる。これらの作品により深く接し、研究を深めたい。また、若冲到影響を与えたとされる八種画譜と南蘋派などについても今後知識を深めていきたい。

今回は大変興味深い画家の作品がテーマだったにもかかわらず、国際学会を間近に控え、推敲する時間がなく、間に合わせの分析・考察となった。トレースに至っては、手元に偶然あった紙と鉛筆でとりあえず作成したお粗末なものである。この点について最後にお詫びを申し上げたい。

【注】

- 1) 山下裕二 2003 若冲についての覚書―「動植綵絵」中の4作品のルーツを探る―
http://www001.upp.so-net.ne.jp/rena/new_page_12.htm
(明治学院大学大学院文芸学専攻紀要『bandaly』第1号)
- 2) 同上

【引用図版】

伊藤若冲『菊花流水図』

<http://www7a.biglobe.ne.jp/~kinokokingdom/nihonga-museum-jakuchu.html>

尾形光琳『紅白梅図』

<http://bunka.nii.ac.jp/SearchDetail.do?heritageId=127325>

酒井抱一『夏秋草図屏風』

<http://blog.goo.ne.jp/harold1234/e/38e6ce613f7e946b0bda8492f96c05f0>